

中学校入学試験問題
(第1回)



国語

(平成27年度)

指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
それまでこのページをよく読んで待ちなさい。

〔注意事項〕

- 問題の内容についての質問には、答えられません。それ以外のことがらについて、
たずねたいことがあれば、手をあげて、監督^{かんとく}の先生に申し出なさい。
- 受験番号は算用数字(1・2・3……)で書きなさい。
- この問題用紙に受験番号と氏名を記入しなさい。
- 答えを書くときには、「,」や「。」やかぎっこなども1字と数えます。

受 験 番 号			

ふりがな	
氏 名	

—

次の問いに答えなさい。

問1 — 線部を漢字に直しなさい。ただし、送りがなの必要なものは、それもふくめて書きなさい。

- ① サイバンの内容を調べるため、弁護士に話を聞いた。
- ② 駅と自宅をオウフクした。
- ③ 目上の人をウヤマウ。

問2 — 線部の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① どうぞ、ご注文を承ります。
- ② 厳かな雰囲気の中、祭典が始まった。
- ③ これからもますます精進したいと思います。

問3 それぞれの□には同じ漢字が入ります。その漢字を答えなさい。

暗□ □内 字□ □府

問4 次の漢字に共通する部首名を、ひらがなで答えなさい。

礼 祝 神 社

問5 「突然の出来事で、おどろきあわてることのたとえ」として

用いられることわざ・慣用句を、次から選びなさい。

- ア 寝耳に水
- イ 冷や飯を食う
- ウ 身もふたもない
- エ つめに火をとます

問6 ものの数え方としてまちがっているものを、次から選びなさい。

- ア 母から「おはしを二ぜん用意して」と言われた。
- イ 新しいクツを一對買ってもらった。
- ウ 友人の家の庭にバラが一輪咲いていた。
- エ 一編の詩が、とても心に残っている。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「縄文人はオレの真似をしている」
そうおっしゃったのは、かの岡本太郎先生でした。^①縄文人もさぞかしめんどくらったでしょうが、言わんとすることはそのくらい新鮮だったということでしょう。そして岡本太郎氏の言い方を借りれば、縄文土器は「何だこれは！」という爆発的なエネルギーに満ちていたということだったのでしょう。

そんな縄文土器を、日本人なら皆絶対一度は写真などで見ているはずです。どんなに美術に興味がない人でも、日本美術史の本の最初の方のページで、ここだけは見るという場所に掲載されています。しかし同時にこれだけで美術に興味を失って、次の「弥生の美術」はもう見なくなる、その元凶でもあるのです。これはどういうことでしょうか。日本人の美術離れの原因の一つは、この縄文土器や縄文時代の「土偶」が何ともつまらなく思え、人々に「またこれか」と思わせてしまうところにあります。【ア】
では、なぜ「もういい」と感じるのでしょうか。それは例えばこうなるわけです。

「これならウチの子供が小さい頃やっていた粘土細工と同じだ」
そうです。ここにこそ縄文のポイントがあるのです。まさにその粘土細工を、一万年前に日本列島の人々がやっていたのです。別の見方をすると、あなたの子供の粘土細工も、奇跡的に一万年残ればこうなるということでもあります。そして遠い将来それを見た未来人も、同じ人間なら（火星人に征服されていなければ）、「やれやれ

またこれか」と感じることでしよう。そのくり返し。何万年たつても人間は皆同じ。本質は変わらないのです。
とは言え、とにかく土でできた器が一万年も残っているということとは、並々ならぬことではないでしょうか。【イ】私はこれこそが縄文土器や縄文時代の出土品の魅力だ、と考えています。

さて、一万年前の日本人が、土器の表面に縄をこりこすりつけ、何やら模様のようなものをつけているところを想像してください。

なんでそんなことをしているのでしょうか。模様がなくても、土器としては使えますね。それどころか縄文土器には実用に支障をきたすと思えるほど、出たりひっこんだりしている、凝りに凝っているものが多いのです。使う時に指がひっかかって邪魔だと思つた縄文人もいたかもしれません。

よほどヒマだったのでしょうか？ それは違います。彼らの日々の時間のほとんどは食料の確保や子供の世話という死活問題に使われていたはずで、ではそれほどまでしてなぜ、こんな手のこんだ一見ヒマつぶしに見られる行為をしていたのでしょうか。

私はここでパプア・ニューギニアの、現在も現地の人々によって使われている土器を思い出します。それは煮炊き用の鍋で、表面には「へび」が描かれています。へびは彼らにとって神様です。そしてニューギニアの人々は何とその神様であるへびをこの鍋で煮て食べてしまうのです。神様に体の中に入っていたくという発想か

ら、へび神様をクッキングする鍋にへびの絵が描かれているのです。その様子が目に浮かびませんか？ 何ということだ、という感動と同時に、そんな！ という驚きがあるでしょう。しかしこれこそが人間と神々、そして自然、宇宙がまさに一体化する感動的瞬間なのです。

縄文について、この考えをもとに想像をふくらませてみましょう。^④「なんでこんなにまで鍋、釜を縄の目の模様で飾らなくてはならなかったのか」という問いです。そこでもう少しくわしく文様について考えてみると、一つの共通した傾向が見えてきます。それは「うずまき」文様の存在です。

うずまき。それは今も昔も私たちの身近にとっても多く見つけることができます。子供の頭を見ると、まずつむじがうずまきです。赤ん坊を抱くと、このうずまきしか親の目には入ってきません。ここではうずまきは大切な A と一つになって存在しています。

水道の蛇口から勢よく出た水が排水口へ流れる形もうずまき。これはあまりになじみがありすぎ、言われないと気付かないかもしれません。しかしここにおいてうずまきは、 B と共にあります。

巻貝を真上から見ると、これはもう完全なうずまきです。このうずまきは美と同義です。花を真上から見ます。すると葉や花びらはらせん状、即ちうずまきのように芽をふきながら順番に生えてくる

ことに気付きます。この場合は、 C としてのうずまきです。

もしかするとうずまきは、この世の中の不思議なこと、大切なこと、美しいこと、自然なことに共通する根本存在かもしれません。そのことを縄文人たちは考えていたに違いないのです。ですから、そのうずまきを自分たちのつくった土器に描くということは、むしろ極めて自然な行為と考えるのもよいでしょう。そのようにして、自分たちがつくった人工物を宇宙の現象や事物と D させていったわけです。それで大切な食料を煮炊きしたり、実を貯蔵するということは、実にすばらしいことではないでしょうか。

人里離れた地において、私たちは夜になると満天の星々の中にいることに気付きます。【ウ】そして、いやでもここが宇宙だと感じるので、寝ころんで空を見ていると、体が軽くなって宇宙に浮んでいるような気になることさえあります。^⑥縄文人にとってはそれが日常だったのです。日々の瞬間に、宇宙の中で自分が生きていると感じます。天の怒りのような竜巻や冬の木枯らしなどのふとした出来事、へびがとぐろを巻いているそのおそろしい様子など、うずまきは森羅万象の様々な形となつて彼らの前にあらわれている……。それを自らの造形物に描きしるし、その力を借りようとすることに、何の不自然があるでしょう。

私はこのようなことから、縄文土器のほとんど全ての装飾模様はうずまきを基本にして展開していったと考えています。作り手は、

うずまきをタテにのぼしたり押しつぶしたり横にのぼしたりしながらその間を埋めていく。その過程で点を打ったり線を引くなどの新たな意匠がひらめいたり、いろいろな形に変形させたりして、様々に発展させていったのだらうと推測しています。

底部がとがっている土器、これは自力で直立できないものです。当然、土の中に下部を埋めて使ったことでしょう。中に果実など、大切なものを入れて使っているところを想像してください。土の茶色と土器がうまくハーモニーを奏で、緑の草や花々ともとけ込み絶妙に調和しているのが目に浮かびます。ところが、縄文土器が博物館の陳列棚の中にピアノ線であって展示されていても、少しも感動しないし、美しくもない。教科書に白バックで載っている、何だかよくわからなくて、面白くもおかしくありません。土に埋めたり、美味しそうな果物でも入れたりして撮った写真が日本美術史の本に載っていたら、さぞかし興味深いページになるに違いないのに……。見せ方一つで、美術に対する興味も理解も大きく違ってくるはずです。【エ】そうすれば縄文土器はもつと魅力的なものになるに違いありません。

さてあなたのお子さんの粘土細工に「うずまき」はあるでしょうか。それを探すのは、縄文の応用として面白いことですし、日常を新たな視点で見ることでもあります。ふだんの何げない人工物にうずまき文様があつたら、それはまさしく縄文時代の記憶の残像なのではないか。そう思っているいろいろなものに接する目を持つ。それが

縄文という文化、精神を現代に生き続けさせる、ということなのではないでしょうか。

（『美術の核心』千住博）

【注】

*森羅万象：宇宙間に存在する一切のもの。

*意匠：色や形などに工夫をこらすこと。デザイン。

問1 本文からは次の一文が抜けています。この一文が入るところを、【ア】～【エ】から選びなさい。

学者や編集者のイマジネーション一つで、縄文人の宇宙観が伝わることでしよう。

問2 — 線①「縄文人もさぞかしめんくらったでしょうが、言わんとすることはそのぐらい新鮮だったということでしょう」とありますが、この意味としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 縄文人もきつとあわてたでしょうが、言おうとすることはそのぐらい新鮮だったということでしょう
イ 縄文人がいたら絶対にまごついたでしょうが、言いたかったことはそのぐらい新鮮だったということでしょう
ウ 縄文人もきつとあきれたでしょうが、言わないで隠していた気持ちはそのぐらい新鮮だったということでしょう
エ 縄文人もきつと感心したでしょうが、伝えたかったことはそのぐらい新鮮だったということでしょう

問3 — 線②「美術に興味を失って」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 縄文土器が凝りに凝っているから
イ 一度は写真で見ているはずだから
ウ 子供のする細工と同じだと感じるから
エ 爆発的なエネルギーに満ちているから

問4 — 線③「縄文のポイント」とありますが、それは何ですか。ふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 子供のつくるものと同じ、そぼくで単純なものが多く、誰が見てもなつかしさを感じる
イ 表面に縄の模様をつけるといって、他の時代には見られない高度な技術が用いられていること
ウ たとえ時代がへだたっていても人間のおおもとは変わらないと感じられること
エ 器としては実用化しにくい反面、長い年月をへても生命力があふれ続けていること

問5 — 線④「なんでこんなにまで鍋、釜を縄の目の模様で飾らなくてはならなかったのか」とありますが、どうしてですか。その理由を、文中の語句を使って説明しなさい。

問6 — 線⑤「うずまき」とは、縄文人にとってどのようなものだと思われていますか。ふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 神様を体の中に導き入れるもの
イ すべてのひそんでいる大切なもの
ウ 生命のみなもとをたとえているもの
エ 人間に生きる力を与えてくれるもの

問7 A C に入る語句の組み合わせとしてふさわしいものを、次から選りなさい。

- ア A はかなく、いとおしい生命
B 大自然の法則
C 愛するもの・かけがえのないもの
- イ A 愛するもの・かけがえのないもの
B 大自然の法則
C はかなく、いとおしい生命
- ウ A 大自然の法則
B はかなく、いとおしい生命
C 愛するもの・かけがえのないもの
- エ A 大自然の法則
B 愛するもの・かけがえのないもの
C はかなく、いとおしい生命

問8 D に入る語句を漢字三文字で文中から探し、書きぬきなさい。

問9 — 線⑥「縄文人にとってはそれが日常だったのです」とありますが、どういうことが「日常」だったのですか。文中の語句を使って答えなさい。

問10 — 線⑦「様々に発展させていったのだろう」の主語を文中から探し、書きぬきなさい。

問11 本文の内容としてふさわしいものを、次から選りなさい。

ア 現代人が縄文土器を魅力的なものだととらえられるようになるためには、くらしの中で感動やおどろきを感じることに大切である

イ 現代の食器とちがって縄文土器の底がとがっているのは、下部を埋めることで草や花などを入れるのにちょうどよいからである

ウ 現代は、縄文の文化や精神を応用して成り立っているという意識して生活すると、歴史に対してもより興味を持てるようになる

エ 昔との接点を見つけるといことは、その時代の文化やそこにいた人々の精神を現代に生き続けさせるといいうことにもつながる

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「で、団体戦に出るのは……、坂口先生？」
澤田先生が坂口先生にたずねている。個人戦は全員出られるが、団体戦は三人一組で行われるので、一人外れることになる。
由佳先輩と、実良、それに春。
それが順当なところだ。実力も度胸も、まだまだ自分は三人には勝てない。

へたつぴな自分が選ばれるわけがない。
そう思うと、胸にぽっかりと空いた穴がぎゅんと広がるような気がした。うら寂しいようなやるせない気分になる。

「それはまだ決めていません」

坂口先生は答えた。少し意外な答えではあった。たいてい団体戦のメンバーは試合の二週間前には発表される。それから、三人での練習に切り替わるのだ。

③ どうせわかっているのなら、早めに発表してあげればいいのに。
早弥は思いながら、プリントを折りたたんだ。

早弥は子どものころから、不器用な子だった。折り紙も、ねんども、リボン結びも、幼稚園時代の早弥にはぜんでできなかった。小学校に入ると、体操服の着替えはいつもびり。体育のあった日のランドセルには、靴下が入っていた。どんなに大急ぎでやっても、靴下までまわらないのだ。

三月生まれだからかもしれない。体も小さく、何をやっても人並

みにはできなかった。

中学生になったとき、弓道をやろうと思ったのは、部活説明会で素敵だなどと思ったのは本当だけど、これなら自分にもできるかもしれないと思ったからだだった。

足の速さや俊敏な反射神経も要求されない。引つ張っては離すだけで、矢は勝手に飛んでいつてくれる。

④ けれど、それは大まちがいだった。初めての前練習をした日、たった二本の矢を射ただけで、早弥はへとへとになってしまった。

「不必要なところに、力がたくさん入っているようですね」

坂口先生から言われた。そしてそれを気にしたとたん、呼吸は乱れ、動きはちぐはぐになった。

そんな早弥を尻目に、実良はどんどん上達していった。ぱさん、ほんとに情けない音を立てて、矢道に矢を落とす早弥の隣で、実良は心地よい中の音を軽やかに鳴らし続けてきた。

実良は天才なのだ。自分とはちがう。

坂口先生が、夏の試合について重大な発表をしたのは、期末テストが終わった日だった。試合まで一週間。ここからは、毎日試合形式で、集中的に練習をしていくというタイミングだった。

「今年は、個人戦、団体戦ともに、柏木さん、石田くん、伊吹さん⑤の三人で登録をしました」

心臓が、大きく一つ音を立てた。

一瞬、静まり返った。

なんで、わたしが。

鼓動が早くなる。

とつさに実良を見た。ぼかんとしている。

早弥の予測に反して、実良の調子はなかなか戻らない。それもおかしい具合だった。近距離から巻きわらに打ちこむ練習のときには問題なく射ることのできる矢が、的の前に来るととつぜんコントロールがきかなくなるのだ。フォームにも呼吸にも問題がないのに、離れのタイミングだけがずれてしまっただけだった。

「五秒です。五秒待ちなさい」

その日も、坂口先生は実良につきっきりで指導していたが、実良の状況は変わらなかつたようだ。弓と体が引き合っている会の状態で、五秒は待つのがふつうだが、なぜか一秒も待てない。

「試合までに、実良の、松原さんの調子はよくなると思いますが」
正直な言葉が早弥の口について出た。実良のことだから、すぐによくなるはずだと思う。第一自分には、**A** が重すぎる。

「確かに松原さんの調子はよくなります」

「じゃあ」

その先をあせる早弥に、先生はさすようにゆっくりと言った。

「けれど、今日明日のうちに直るというものではないように、わたしには思えます。あせりは禁物です。その場しのぎで無理やり調整しても、かえって悪くなってしまうこともあるのです」

「いつまで待てばいいんですか」

⑦ せきを切ったように、実良はきいた。

「公式の大会じゃなくて、練習試合には出られるんですか？」

「それはわたしにもわかりません」

「そんなあ」

「ただ、言うことは、今の状態はきつと直るということです。今はひたすら精進しなさい。矢数を重ねなさい。そして、直ったときには、あなた自身が今よりもずっと大きな人間になっているということです」

「そんなのぜんぜんわかりません」

実良は大きく首を振り、そのままがつくりと頭を落とした。先生は静かに声をかけた。

⑧ 「それがわかれば、精進する必要もないでしょうね」

なんだか禅問答みたいだ。

たまりかねたように実良は立ち上がった。

「もう、いい！」

ガラスが割れるように叫んで、体操服のまま道場から飛び出していった。

ガクあじさいが枯れていた。水切りをしなかったせいだ。棚の下には、実良が残っていた荷物が一かたまりになっている。

逃げ出したかったのは、わたしのほうだ。

団体戦のレギュラーになるなんて、まったく予想外だった。そ

りや、選ばれる人たちがうらやましく思う気持ちはあるけれど、自分にはそんな力はないことは、わかつている。

「はあ」

大きなため息をつく早弥に、

「これ、届けてやろう」

と、春が実良の荷物に指をさした。道具入れの中には、制服も入っているはずだから、これがなければ、明日は困るだろう。

けれど、早弥はすぐには返事ができなかった。実良にしてみても、自分よりもへたくそな人がレギュラーに選ばれて、きつとおもしろくないだろう。どんな顔をすればいいのだ。

「わたしが行こうか？」

⑨ 案じたように言ってくれた由佳に、早弥は首を振った。先輩にそんなことをさせてはいけない。

「大丈夫です。春、行こう」

早弥は実良のバッグをつかんだ。たわなにぶら下がったマスコットが揺れるそれを、肩にかけた。ずっしりと重い。それはそのまま、早弥の肩にかかった試合へのプレッシャーのようだった。

「いくら調子が悪くても、実良が出たほうがましやないかな」

歩きながら早弥は春にたずねてみた。正直な気持ちだったけど、言葉にしたらひどくみっともなく思えてくる。

自分でもうんざりするような問いを春は真剣に受け取ってくれたのか、じつと考えこんでいる。

やがて、ぼつんと言った。

「早弥は試合に出たくないんか」

質問を質問で返されて、とまどった。そんなこと考えたことがなかったのだ。入部したときから、自分が一番へたっぴだったから、三人しか出られない枠に入るとは考えたこともなかった。

「もっと自分を信じろっちゃ」

質問に答えられないで黙っていると、春はそう言った。

「信じられん」

「なんで」

「だって、わたしだよ？」

だめな自分のことはよくわかつている。

「だいたい、早弥はおびえすぎなんちゃ。おれだって、怖いんよ」

「だって、わたしが一番へたくそなんよ。春とはちがう」

春とだけじゃない。段位を持つている由佳とはもちろんのこと、才能にあふれている実良とも自分はちがいきすぎる。

「そりゃみんなちがうやろ」

春は言った。ふと春を見る。思慮深そうな静かな目だ。⑩ 春が言う

と「ちがう」という言葉は果てしない意味を持つように思えた。

春にはきつと、いろんなことがあったにちがいない。
小学校五年生で日本の小学校に転校してきた春。学校のみんなは、びっくり仰天で迎えた。春の外見が、あまりにちがいきすぎていたからだ。早弥の住む地方都市において、外国人というのは珍し

い。しかもアフリカ系の父を持つものだからなおさらだ。
最初、春の周りにはだれも近寄らなかった。早弥だってそうだった。

今になってみれば、自分の肌の色の延長線上にあるにすぎないとわかる春の肌が、まったく種類のちがうものに感じられた。ちゃんと見れば、ぱつちりと澄み切っている目にも、野生動物のような鋭さを感じた。

そのうえ、春の日本語は、あまり上手じゃなかったから、どんな子なのかわかりづらかった。

そのうち、春の性格の素直さや、頭脳の明晰さ、並外れた運動能力やリズム感、そういうものが顕著になってくるにつれ、警戒感も薄れてきた。自然、春は人気者になった。が、同時にそのころから、心ない中傷をする人が出てきたのも事実だ。

「ちがうのはあたりまえなんよ。だけ、それぞれに持てる能力で最善をつくすしかないんよ。早弥も自分なりにがんばれ。がんばって、試合で負けてもだれも責めん。少なくともおれは」

春が言った。すつと心が軽くなる。

（『たまごを持つように』まはら三桃）

問1 — 線①「胸にぽっかりと空いた穴がきゅんと広がるような

気がした。うら寂しいようなやるせない気分になる」とありますが、ここでの気持ちの説明としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 個人戦には出られることで、満足している自分の器の小ささに失望している

イ 自分が試合に出られないことを受け入れ、自分との勝負をしようと覚悟を決めている

ウ 自分が選ばれるはずはないとあきらめ、友人たちと比べて劣等感を持っている

エ 練習が足りていないため、自分だけ仲間外れになっているのを悲しんでいる

問2 — 線②「少し意外な答えではあった」とありますが、そのように感じた理由としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア いつも厳しい先生が気分をやわらげようとしてくれたから
イ いつもと違い、澤田先生がメンバーを発表しなかったから
ウ きつと自分もメンバーに選ばれるはずだと信じていたから
エ 団体戦のメンバーはすでに確定していると思っていたから

問3 — 線③「どうせわかっているのなら、早めに発表してあげ

ればいいのに」とありますが、ここからわかる様子としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 団体戦のメンバー発表を、どこか他人事のように感じている様子

イ 早めに発表してくれない先生に、強い怒りを感じている様子

ウ 団体戦の練習に早く切りかえたいと、あせりを感じている様子

エ 今までの努力を、少しは先生に認めてほしいと感じている様子

問4 — 線④「それ」とは、どのような考えを指していますか、三十文字以内で説明しなさい。

問5 — 線⑤「心臓が、大きく一つ音を立てた」とありますが、このときの気持ちの説明としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 段位を持っている実良が選ばれず、びつくりしている
イ 期待していた気持ちがうらぎられてしまい、絶望している
ウ 恐れていたことが現実となつてしまい、くやしき思っている
エ 予想もしていなかったことが起こり、非常におどろいている

問6 — A に入る語を、漢字一文字で答えなさい。

問7 — 線⑥「じゃあ」の後に続くと考えられる言葉を、二十字以内で答えなさい。

問8 — 線⑦「せきを切ったように」の意味として正しいものを、次から選びなさい。
ア 張りつめていたものが、一時とぎれてしまうように
イ がまんを重ねていたものが、一気に爆発したように
ウ ずっと続けていたものが、突然打ち切られてしまうように
エ おとなしかったものが、急に張り切って勢いづくように

問11 — 線⑩「春が言う」と『ちがう』という言葉は果てしない意味を持つように思えた」とありますが、どうしてですか。その理由としてふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 春は日本語があまり得意でない分、「ちがう」という言葉にかなり敏感だから
イ 日本に来てから、春は他人と「ちがう」ことで人一倍苦労してきたから
ウ 素直な性格の春が、「ちがう」という言葉を口にするのと違和感があるから
エ 春が「ちがう」と言ったのは、早弥の悩みを真剣に受け取ってくれているから

問12 — 線⑪「ずっと心が軽くなる」とありますが、ここでの気持ちの説明としてふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 自分が試合に出ることは実力を見れば当然のことだと言われ、ますます自信がついたから
イ たとえ試合で負けてもだからと責められないと春に保証されて、安心したから
ウ 他人と比べるのをやめて、自分のできることを精一杯やればよいと気づいたから
エ 由佳と実良の三人で力を合わせれば、試合に勝てるような気がしてきたから

問9 — 線⑧「なんだか禅問答みたいだ」とはどういう様子を表していますか、次から選びなさい。

- ア 実良と先生との会話が、押さえどころやつかみどころのないやりとりになっている様子
イ 自分の意見を絶対に曲げない実良と、聞く耳を持たない先生との会話がかみ合っていない様子
ウ ありがたいお話をしてくださっている先生と、それに真剣に答えようとする実良の様子
エ 先生と実良との会話が、対立してしまい感情をぶつけあう押し問答になっている様子

問10 — 線⑨「案じたように言ってくれた」とありますが、「案じた」内容の説明としてふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア レギュラーに選ばれなかった早弥が怒っているのではないかと想像した
イ 早弥には実良の荷物を一人で運ぶのが大変なのではないかと気づかった
ウ 今の状況で早弥が実良と会うことは気まずいのではないかと心配した
エ 自分には実力が足りていないと落ち込んでいる早弥を、優しく思いやった

平成二十七年 度 中 学 校 入 学 試 験 (第 一 回) 国 語 解 答 用 紙

得 点

一

問 1
①
②
③

問 2
①
り
②
かな
③

問 3

問 4

問 5

問 6

二

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

問 11

三

問 1

問 2

問 3

問 4
20
5
25
10
30
15

問 5

問 6

問 7
15
5
20
10

問 8

問 9

問 10

問 11

問 12

受 験 番 号

氏 名
ふりがな